研究と読書

東京大学大学院アジア文化研究専攻
張　珺

3 月の研究報告会の後、みんなでお弁当を食べながら研究の話をしていた。すると、生物学を研究している後輩が、「毎日実験室で試薬をいじってばかりいるけれど、文系の研究者は普段どんなことをしているのか、まったく想像がつかない」と問いかけた。

文系の研究者がすることといえば、論文を書くことを除けば、一言で言うなら「読書」に尽きる。ただし、研究のための読書は、一般的な読書とは異なる。そこには探究の志があり、1 つの問い、例えば、博士論文の課題を解明するために、膨大な文字の海から手がかりを探し求める営みがある。

中国の学者・王国維は、読書には 3 つの境地があると述べている。研究とは、おそらくその第 3 の境地、「众里尋他千百度、驀然回首、那人却在灯火闌珊處（幾度も人混みの中を探し求め、ふと振り返ると、その人はほのかな灯火の下に佇んでいた）」に通じるものだろう。千ページもの史料をめくっても、何の収穫もないことは日常茶飯事であり、たとえ三行でも有用な記録に出会えたなら、それは幸運とすら言える。だからこそ、史料との出会いには、どこか宿命めいたものを感じずにはいられない。幾千万の文字の中から、自分が求めるただ一節とめぐり逢う。それは、果てしなく流れる時のなかで、吉光片羽（きっこうへんう：僅かに残る昔の文物、優れた遺品）をすくい取る瞬間。ただその一瞬に、ただ静かに呟くのだ。「ああ、あなたはここにいたのか」と。

しかし、もし文系の研究者に「最近、最初から最後まで通読した本はありますか？」と尋ねたら、多くの人はしばらく考え込んでしまうだろう。著者の労苦には申し訳ないが、私たちはまず序文をざっと眺め、それから自分の研究に関係のある部分を探し出し、必要な箇所を読み終えたら、本をそっと脇に置く。そんな読み方がほとんどだ。

研究のための読書は、どこかお見合いに似ている。理想の相手を探すとき、多くの人は身長や容姿、性格、趣味といった条件をあらかじめ思い描いている。そして、いざ実際に会ってみて、少しでも理想と違うと感じれば、あっさりと手を引いてしまう。研究者が本に向き合う姿勢も、それとよく似ているのかもしれない。

研究に宿る運命の重みとは異なり、読書にはもっとロマンティックな魅力がある。それはまるで、「春色満园关不住、一枝紅杏出墻来（庭いっぱいに満ちた春の色は閉じ込められず、一枝の紅杏が垣根を越えて顔をのぞかせる）」ように、思いがけない邂逅に満ちている。

私たちが 1 冊の本と出会うのは、偶然の積み重ねによるものだ。誰かの薦めかもしれないし、流行に影響されたのかもしれない。あるいは、ふと目にした紹介文に惹かれたのか、本のタイトルに心を奪われたのか、装丁の美しさに魅了されたのかもしれない。私が聞いた中で最も奇抜な本の選び方は、あるドラマのワンシーンにあった。目を閉じて古本の山に手を伸ばし、無作為に 1 冊を引き抜くというのだ。そうすることで、自分の興味の枠にとらわれることなく、新しい世界へと踏み出せる。偶然がもたらす出会いの妙。そこには、思いもよらぬ発見と、ときめきが詰まっている。

大学時代の親友は会社員で、私たちは昔からよく本の話をしていた。彼女は老舎や谷崎潤一郎、ドストエフスキー、カルノウィについて語る。会社勤めの彼女はウェーバーの『学問の使命』を読んでも、それが「研究」とは何かを深く考える必要はない。ただ純粋に、本を読むことを楽しんでいる。私は、そんな彼女の読書の自由を羨ましく思う。私の想像力は、研究課題にすり減らされていく。彼女が知の海を自由に泳ぐ一方で、研究者である私は「弱水三千、只取一瓢飲（果てしなく広がる流れの中から、たった一瓢の水をすくい取る）」ことを求められる。

しかし、博士論文を書いている間、不思議なことに、研究とは無関係の読書がどんどん増えていった。夜明け前の数時間、背徳的な喜びを感じながら、夢中にページをめくる。食レポ動画やかわいい動物の映像を見ても、それは一瞬の気晴らしにすぎない。ひとつ見終われば、次へ、また次へと無限に手が伸びる。しかし、それでは決して満たされない。いくら摂取しても、精神はまだ飢えたままだった。

研究によって得られるのは、謎を解き明かすような達成感であり、突破の瞬間だ。それは、読書がもたらす精神の滋養とは異なるものだ。人は読書を必要とする。たとえ私たちの仕事が、日々本を読むことであったとしても。なぜだろうか。私の好きな俳優、エイドリアン・ブロディが主演した映画『デタッチメント 優しい無関心』には、こんな言葉がある。「僕たちは、残された人生のすべての時間、24 時間ずっと、働け、努力しろと駆り立てられ、やがて沈黙の中に消えていく。だからこそ、退屈と虚無が心に入り込むのを防ぐために、僕たちは想像力を刺激する術を学び、読書を通じて自分自身の信念を守らなければならない。僕たちは皆、この力を必要としている。抗うために、そして、純粋な精神世界を失わないために。」